

蘇る50年代。

よみがえ

CABARET

キャバレー

1986

男には、ダンディズム。
女には、ロマンス。
ジャズの旋律が、
かなしいほど似合っていた。
絶望から生まれた
希望の時代。

製作・監督・音楽監督

角川春樹

原作●栗本 薫
(角川文庫版)

野村宏伸

鹿賀文史

三原じゅん子

原田知世

真田広之

宇崎竜童

ジョニー大倉

尾藤イサオ

丹波哲郎

千葉真一

夏八木 勲

永島敏行

志穂美悦子

薬師丸ひろ子

本間優二

原田貴和子

古尾谷雅人

渡辺典子

清水健太郎

室田日出男

原田芳雄

倍賞美津子



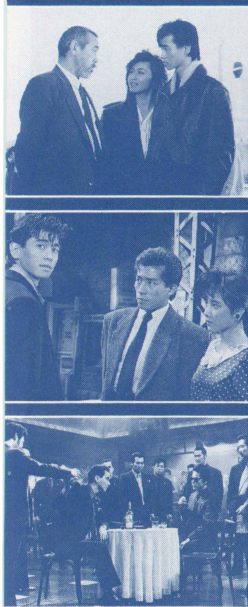
解説

原作・栗本薫（エッセイでは中島梓）にとつて、「胸のいたむほどなつかしい作品」と述べさせた同名小説（角川文庫版）の映画化。プロデューサー・角川春樹が小説「キャバレー」に見たものはふるえるようなジャズの旋律と場末に生きる人間たちの熱い想いと哀しみが渾然とする不思議な一体感だった。強烈な「映画化への衝動」と「ジャズを映像で表現したい」と言う意欲が、自ら監督として乗り出させたもので、監督・角川春樹としては「汚れた英雄」、「愛情物語」に次ぐ三作目。

甘ったれ学生ジャズに決別し、本物の「ジャズ」を求め、港町のキャバレーのバンドに身を置く青年・俊一に主演の野村宏伸。映画「メイン・テーマ」のオーディションで二万三千人の中から選ばれたラッキー・ボーイ。天

性の才能と感覚を持ち合わせていると言うべきか、5ヶ月の特訓でアルトサックスの腕前はプロの耳を唸らすほど。撮影は吹き替えなしで臨んでいる。

角川映画10周年記念作品にふさわしく豪華なゲスト陣が続々と画面に登場する超過激なエンターテイメント作品で製作費は五億円。ゴールデンウィーク公開（東宝洋画系）



角川春樹事務所 創立10周年記念作品

キャバレー



物語

不幸でなければジャズが出来ないとは思わない。しかし都会の大学生活の中にはジャズがない。ジャズのある必要がなかった。だから矢代俊一は場末のキャバレーに自ら落ちてきた。スターダストという、今の俊一には似合わない名前のキャバレーだった。まだ19才。上流家庭に育った俊一の自分だけの音を求める姿はキャバレーのステージにはそぐわなく、それだけにどこか輝くものがあった。

片隅の指定席でいつも俊一のサックスに耳を傾けている男がいる。多額のチップと決まって同じリクエストを寄せるこの男、菊川組の代貸で滝川という叩き上げの筋者である。リクエストはいつも「レフト・アローン」。

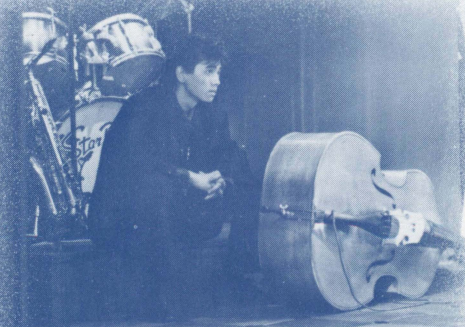
滝川は刑事に張られていた。小坂井という中年の刑事は十年前から滝川をマークしているという。滝川はケイという女を呼び出して拳銃を預けた。南部恵。俊一が尊敬するアルトサックスの天才、南部明の妹で、三年前に別れた滝川のもとの女、そのケイは俊一のサックスに「瞬体を震わせたが、ボーヤ、気持ち良かったらうね」と一言残して去っていった。俊一はひどく傷いた。

その夜、俊一はホステスの英子になぐさめられて、肌を合せた。初めての体験だった。「いまサックスを吹いたらどんな音になるのかな」。俊一はそんな感慨をもって朝を迎えた。滝川にも南部明にも、人を殺すような何かがあるが、抱かれるだけで震えるような何かがあるのよ、ケイは云う。俊一もそんな宿命を背負っているように思う。ハートはあるのよ。ただ、傷ついたことがない、血を流したことがない、叫びもしないハートだけれども……。

南部恵のこの言葉が次第に現実の姿をとりはじめた。とめようのない男たちだった。俊一も滝川も、自分にとって大切なものを手に入れるために、魂を手に入れるために、命を引きかえにしようとして心に決めていた。

キャスト

- 矢代俊一.....野村宏伸
- 滝川.....三原じゅん子
- 英子.....鹿谷信子
- 千枝古.....宇田川知世
- 安原英子のヒモ.....真田広重
- 中村ドラムス.....尾藤イサオ
- 浅井ベニス.....尾藤イサオ
- 総長(関東連合).....丹波哲郎
- スターダストのマスター.....千葉真一
- 夏八木.....永島敏行
- 志穂美悦子.....志穂美悦子
- 薬師丸ひろ子.....薬師丸ひろ子
- 本間優二.....本間優二
- 原田貴和子.....原田貴和子
- 古尾谷雅人.....古尾谷雅人
- 渡辺典子.....渡辺典子
- 清水健太郎.....清水健太郎
- 小坂井(刑事).....原田貴和子
- 前川(北愛会組員).....原田貴和子
- 白江白江組組長.....原田貴和子
- 南部恵.....原田貴和子
- 信賞美津子.....信賞美津子



- 製作・監督.....角川春樹
- 音楽監督.....坂上三郎
- プロデューサー.....原比呂志
- 原作.....栗本薫
- 脚本.....角川文庫
- 撮影.....仙元誠
- 美術.....今村元三
- 照明.....藤田進
- 録音.....藤田進
- 編集.....藤田進
- 製作担当.....青木勝彦

製作・角川春樹事務所
配給・東宝株式会社